

# 「虹」

茨城県 安禅寺 染谷 典秀

いにしえの大陸の民は、虹に、天翔る龍の姿を見ました。虹という漢字は、龍の一種をさすことばです。

つかの間、美しい姿を見せ、空に溶けていくように消える虹は、突然空に出現し、その雄壮な姿を地上の民に見せ、やがて空の彼方に消えていく龍のようだと、「虹」と名付けた人々は感じたのでしょ

う。虹は、空気中の水滴に太陽の光が当たるとき、水滴がプリズムとなって、光が分解され複数の色となって現れる現象です。虹は、水滴の大きさや、光の角度などの条件が整ったとき、はじめて見ることのできる現象で、常に現れるものではありません。そして、それらの条件が崩れたとき、虹は消えていきます。条件が整った短い時間、姿を現すものだからこそ、私たちは、虹を目にしたとき、感嘆の声をあげるの

です。さて、「私たちも虹と同じである」と言ったら、唐突に過ぎるでしょうか。

私たちの生命は、世界を形づくっているさまざまな要素が、仮に結びつき合っ

てきているものである、という仏教の存在論があります。考えてみれば、体を構成しているものは、地球上のさまざまな物質です。それらが、ある条件のもとに結びつき、私たちの生命となるのです。そして、時が至り、条件が崩れたとき、その結びつきがほどけて、世界に帰っていきます。つまりそれが「死」

です。私たちも、ある条件のもと、つかの間存在するという意味で、虹と同じです。

つかの間現れ、やがて消えるからといって、虹の輝きは意味のないことだと、誰が言えるでしょうか。虹は、見ているものの心をうちます。大陸の民が虹に重ね合わせた龍のごとく、力を私たちに与えてくれます。

虹と同じである私たちも、与えられた時間の一瞬一瞬を、心を込めて生きる